山本太郎展〜ニッポン画物見遊山〜

Catch! the entertainment

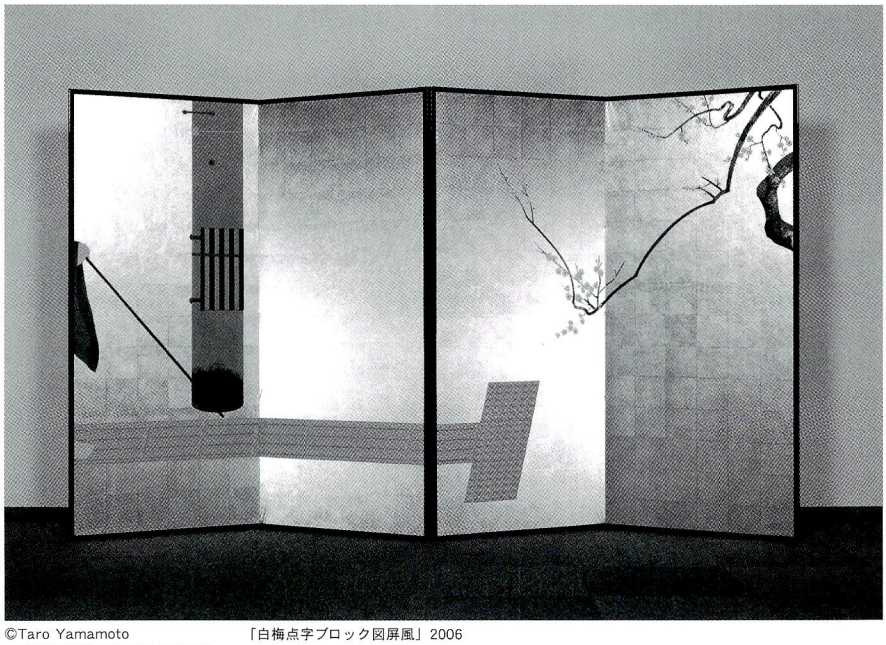
イベント・ライブ・演劇に映画、CDリリースから書評に至るまで、骨太entertainmentを丸飲み！

ART 5.22〜(Fri)

生活臭がある、笑いもある。我々のデイリーライフを描く「ニッポン画」。

思えば「フランス画」とか「イタリア画」なんてないのに「日本画」って奇妙だ。この「日本画」なる言葉、実は明治時代につくられた、まだ新しい言葉なのだ。それ以前、書画は襖や屏風などのインテリアや着物に描かれ、生活の中で愛でられていた。人気画家のライブペインティングを囲んで酒を飲むようなイベントもあったそうだ。それが、額縁に入って美術館で鑑賞する「アート」という考え方が黒船と共に来襲。日本の絵は「日本画」というジャンルの枠でくくられることになった。

山本太郎は、昔はもっと楽しく身近なものだった日本の絵への思いをこめ、オリジナルな「ニッポン画」を提唱するアーティスト。屏風には花鳥風月の代わりにクリスマスツリー、神仏のかわりにアメリカ文化のシンボルが燦然と輝く。単なるパロディではない。作品に描かれるこの皮肉な画題は、現代日本の姿そのもの。つまり日本の画家が最も大事にしてきた「自然」なのである。くすっと笑わされながら、「日本画」が歩んできたちょっと不幸な迷い道も見えてくる。　（沢田眉香子）



©Taro Yamamoto
Courtesy imura art gallery

「白梅点字ブロック図屏風」2006

「紅白幔幕図屏風」2005

■「山本太郎展〜ニッポン画物見遊山〜」　■ 5.22（Fri）〜6.14（Sun）■ 美術館「えき」KYOTO
■ 一般700円　問い合わせ　075・352・1111（JR京都伊勢丹大代表）

街場の演算

肩の力を抜いて、自由に語ろう…、京の街と付き合うということを。

保伊戸 宵（ほいとよい）

【第19回】

お2階カフェが今、注目されているのは、「お茶する」ことが、日常からの、「ささやかな」「ほんの一時の」逃避であることを、素直に自分に言い含めて、お茶ができるからだ。

本誌の喫茶特集（'08年2月号）は、よほどみんな保存して使っているのか？　未だにあれやこれやと記事のことをたずねられる（編集者冥利につきるうれしい話である）。またそれは、京都の人は喫茶店が「ほんとに好きで好きでたまらないんだ」ということを、実感させてくれる。

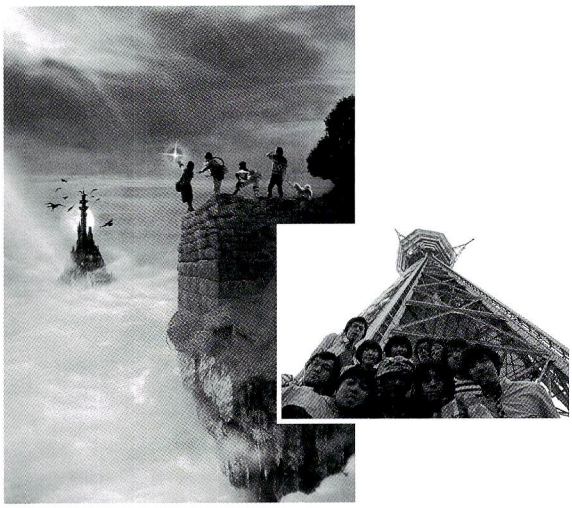
僕と言えば、そんな喫茶店へ出向き、のんびりとお茶でも…という時間をとんと持てていないでいる。本音を言えば、コーヒーならスタバかマックで済ませてしまっている有様である。それも、ひとりで出かけて一気飲みしてすぐに出てくるのがオチである。でも、やっぱりカフェというか、お茶したり、ちょっと冷たいものでもしたり…という空間には、ついつい逃避行（自分ではフォーエバーといっている）しに出かけてしまう。

最近のお気に入りは「サラサ麩屋町PAUSA」や「カフェ・コチ」。ま、事務所のご近所さんということもあるんだけれど、なんというか、2階のちょっと目立たなさと、若いカップルが入ってきたら、自分の居心地が悪くなって「さて、仕事に戻るか〜」というモードにさっと入れるのがなんといってもいい感じなのである。

どちらも、2階から（席にもよるが…）外が見えるっていうのも何となくいい。特に雨の日は、1階よりも2階カフェが断然いい。雨との距離感というかね、そういったものの肌触り具合が、1階店だと靴の底に伝わってくるんだけれど、2階にいるだけで雨とのつき

ヨーロッパ企画第27回公演「ボス・イン・ザ・スカイ」

STAGE 5.15～(Fri)



新作の舞台が「塔」だからって、通天閣で発表会、な策士っぷり。

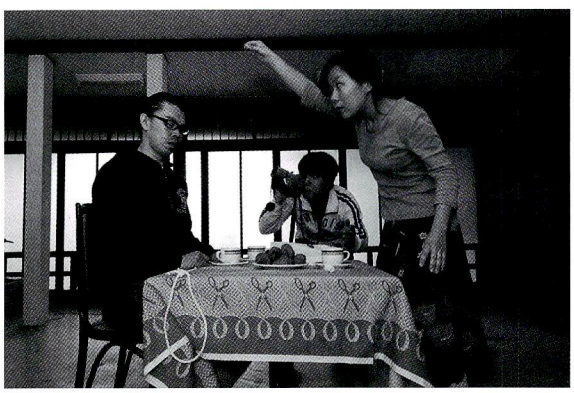
ご存知、京都・二条駅付近にアジトを持つ地元劇団。今冬には「曲がれ！スプーン」の全国ロードショーを控えている人気・実力ともに注目の劇団だ。その新作発表を通天閣でやっちゃうあたり、「らしい」なぁとつくづく。期待せざるを得ないところが。

栗東でのプレビュー公演を皮切りに、京都→広島→福岡→伊丹→東京と巡る今作では、円形舞台に初挑戦。具象ある設定で人々の振る舞いを俯瞰して描くシチュエーション・コメディを得意とする上田誠氏が、左右ではなく上下の空間を意識して地形モチーフから考えた舞台は塔。ファンタジーを夢見物語ではなくリアルに昇華させ、ドラゴンを倒す旅の過程を描く。見どころは、ファンタジーになり切れない面白さ。役者たちの阿吽の呼吸からくるアンサンブルならではのコメディが生まれる瞬間をお見逃しなく。（山田涼子）

■「第27回公演『ボス・イン・ザ・スカイ』」
■ 京都公演5.15（Fri）～17（Sun）　※その他、伊丹公演6.5（Fri）～14（Sun）
■ 料金：一般前売2900円、当日3200円、学生前売2500円、当日2800円
■ http://www.europe-kikaku.com/
■ 京都府立府民ホール アルティ
京都市上京区烏丸通一条下ル龍前町590-1　☎075・441・1414

ニットキャップシアター第25回公演「踊るワン - パラグラフ」

STAGE 5.28～(Thu)



10年目を迎える京都出身劇団に、思わず肩入れしたくなる身内贔屓。

こちらも京都を拠点に活動する劇団で、旗揚げは99年と、意外にも（失礼！）その歴は長い。代表であるごまのはえ氏が抱く独自の幸福感に基づき、ストーリー性豊かに仕上げる戯曲は、体当たり的役者たちによって、芸術性と娯楽性を兼ね備えた芝居へと昇華されていく。

ごまのはえ氏、実は（再度、失礼！）けっこうすごい人。芝居好きで知らぬ者はない賞、第11回OMS戯曲賞大賞＆第12回OMS戯曲賞特別賞を連続受賞した経歴の持ち主。その後もさまざまな受賞を重ね、脚本の力だけでなく、演出の才にも注目を集めている人物である。そんな氏が挑んだ、初のミステリ作品が今回の舞台。

物語の舞台は、ある宗教団体の拠点だった古びたマンションの一室。教祖が姿を消して15年目のある日、そこで起こる「奇跡」を見届けてこその親心。

（山田涼子）

■「第25回公演『踊るワン - パラグラフ』」
■ 5.28（Thu）～6.1（Mon）
■ 料金：一般前売2800円、当日3000円、学生2500円、高校生以下1000円
■ http://knitcap.jp/
■ アトリエ劇研
京都市左京区下鴨塚本町1番地
☎075・791・1966

あい方もなんか恋愛小説風（すごく意味のある事なんだけれど、どうしてか棒読み…みたいな）のようだったりするから不思議だ。

きっと、そういうものは眺めというものへの身体感覚なんだと思う。

商店街にある家に長いこと住んでいた。その家は、いわゆる職住で、すでにその場所での商売はたたんでいたので、大学時代、そこには自分ひとりで住んでいたのだけれど、やはり2階からの眺めはなんともいえない哀愁が漂っていた。部屋と窓の間には廊下があったんだが、その廊下に椅子を置いてよく家の軒というか、商店街を眺めたものだ。よくお茶の世界で、縁側の庭と部屋との境界を論じる人がいるが、2階喫茶って、縁側でないのだけれど、なんかその「縁側感」があるような気がするのは僕だけだろうか？

「おにかいカフェ」がなんで最近増えてきているというか、いい感じなのか？を考えると（というか、そんな喫茶店が増えていて、自分も行っているのが笑えるんだけれど）、それは「お茶する」ことが、日常からの「ささやかな」「ほんの一時の」逃避であることを、素直に自分に言い含めて、お茶ができるからなんて言ったらタイソウだろうか？

だからというわけではないが、ちょっと小言を言うと、京都の多くの（しかも老舗と呼ばれる名）喫茶店が観光地化しているように見えて、どうも気に食わない。店がやかましいのは別段気にはならないのだけれど、そこの名物にありつくことが目的で、喫茶が目的ではない客と隣り合わすことほど不幸なことはない。「スマート」と「築地」の2階に平和な時間が戻ってきてほしいと思っているのは、僕だけではないと思うのだが…。

話は変わるけれど、2階だけでなく、いい意味で遅くまで開いているカフェというか喫茶店が多くなってきた感がある。せめて「夜バス」や阪急、京阪の走っている時間までは開いていてほしいもの。ある意味、そんなカフェは観光客ではなく地元のやんちゃな若い連中に愛され、店も長生きしていくと思う。

保伊戸 宵（ほいと・よい）／コピーライター＆編集者。縁あって（？）近江八幡によく出かけている。得意（？）の近江牛はもちろんのこと、同志社、近江兄弟社学園といった絡みで、ヴォーリズ関連の施設の訪問、撮影が続いている。できれば、ゆっくり一泊くらいさせてほしいものなのだが、いかんせん日帰り圏内…。